

『オハイオ州ワインズバーグ』を読む(8) ——「尊敬すべき資質」の主題は何か?——

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

新堀 孝

シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1949) の『オハイオ州ワインズバーグ』(Winesburg, Ohio, 1919) の老人が言う、各章の中心人物にとっての「真実」(“truth”)¹が何なのかを考察する論考の8回目である。今回は「尊敬すべき資質」²(“Respectability”)を取り上げるが、この章の中心人物であるウォッシュ・ウィリアムズ (Wash Williams) にとっての「真実」は彼の言葉から推察できる。彼は言う、「全ての女は死んでいる。……[女は] 男の視界の中を歩いて、その存在でこの世を汚れたものにする。……奴らには腐ったところがある。……奴らは、男がこの世界を価値あるものにするのを邪魔するために遣わされるんだ」(66) と。これが、ウォッシュ・ウィリアムズにとっての真実である。実際、この真実は、ウォッシュの個人的な経験を過度に一般化した女性観であり、語り手である老人が言う「誤り」(“falsehood”)に相当する。今回の論考では、ウォッシュ・ウィリアムズが、この「真実」を手にする過程を確認し、彼が何故自分の手を「大切にする」(64)のか、さらに、この章の主題は何かを考察し、最後に、この章の話から推察できるワインズバーグの女性の地位について言及することにした。

1. ウォッシュ・ウィリアムズが人間不信になる過程について

語り手が言うには、ウォッシュ・ウィリアムズは、結婚した当時は「見苦しくない青年」(65)だった。これは、彼が当初は精神的に歪んでいないという意味で普通の人間だったことを意味する。しかし、この章の現在において、ウォッシュ・ウィリアムズは「町で最も醜い人間」(64)である。これは、ウォッシュの精神がとても歪んでいることを暗示する。³彼の体の「胴回りが巨大で、首は細く、足は弱々しい」(64)不恰好な様子は、彼の「真実」が客観性を全く欠いた、過度に自分の体験を一般化したものであることを示している。ウォッシュの胴回りが巨大なのは、彼が毎晩「信じられないほどの量のビールを飲んで、……寝床に就く」(65)ことを習慣としており、あまり活動的な生活をしていない結果なのだと

うが、その一方で暗示的な意味があるようにも読める。「胴回り」の“girth”には腰帯の意味もあり、腰帯は「正義」⁴の象徴でもある。つまり、彼が自分の真実として信じていることが正義に基づくものであると信じていることの現れとしても読めるのである。さらに、「首」(“neck”)は「力」⁵を象徴し、「足」(“legs”)は「基礎、速度、精力……生殖器」⁶を象徴するので、これらは、ウォッシュが人間の男としての力——男として生きようとする気力というべきだろう——が減退していることを暗示しているものと考えられる。これは、彼の「全ての女は死んでいる。……女はみんな死んでいるんだ」(66)という言葉とも関係しているだろう。女が皆死んでいるのなら、男も生きている必要はないからである。彼のこのような女性観は、女性に対して絶望し、女性を憎悪していることの結果である。彼の外見のほぼ「全てが汚く、……彼の目の白目さえ汚れて見えた」(64)のは、彼の心の中に、男女を問わず周囲の人間との関係を維持しようという意思がなかったことの結果であろう。デイヴィッド・スタック (David Stouck) は「ウォッシュの白目が汚れている」ことについて、「ウォッシュの目の汚れた白目は、女性の淫らさを見通す彼の洞察力を反映する」⁷という。これは、ある程度正しいと言えよう。しかし、彼がその汚れた目を向けるのは女性だけではない。彼はその目を、女性に対するのとは「少し異なって」(65)、「哀れむ」(65)目ではあるが、男性にもその目を向けているわけで、だとすると、彼の目の汚れは、女性の淫らさだけを見通すわけではなく、全ての人間に対する認識が、現実とは少しずれていることを暗示していると解釈する方が適切なのではないだろうか。ウォッシュは「人生を憎悪していた」(65)し、「彼の町の人間に対する憎悪」(“his hatred of his fellows”) (65)という語り手の言葉からも、ウォッシュが男に対しても嫌悪感を抱いていたことがわかるのだから。ウォッシュの人間観が極めて個人的で合理性に欠けることは、彼の人生の憎悪の仕方が「詩人の奔放さで」(65)あることからわかる。その一方で、彼の人間観が男中心のものであることを語り手は強調する。彼が仕事を終えると「信じられないほどの量のビールを飲んで、……寝床に就く」(65)ことが、それを暗示している。「ビール」(beer)は一般に「男の飲み物」⁸であり、それを大量に飲むことでウォッシュの男としての存在を強調し、この章の内容が男の視点から見られたものであることを読者に印象づけているのである。

ウォッシュのこのような人間不信を引き起こしたのは、彼の元妻の不貞行為と、その不貞行為を帳消しにしようとした元妻と彼女の母親の行為である。語り手がウォッシュの元妻を読者に紹介する際の描き方は、最初から2人の生活がうまく行かないことを暗示しているようである。彼が結婚した女は、「青い目と黄色い髪」(65)をしていた。「青い目」は通常なら「神々の目、……無垢」⁹を表すが、意味が反転して「猥褻」¹⁰や「(無節操、不義など)背信」¹¹を表すことがある。「黄色い髪」は金髪のことだが、golden hair やblonde とは言わず“yellow hair”と言われている¹²。黄色は「暖かさ、愛、……平和、……(精神の)純潔」¹³などを暗示する一方で、「卑怯、精神の頹廃」¹⁴を暗示する。さらに、この女は、

3人娘の末娘だった。3は一般に「聖なる数字」¹⁵とされるが、逆の「裏切り」¹⁶を暗示することもあり、特に、「3つめのものは否定的な意味を表すことがある」¹⁷とされる。これもまた、彼の結婚生活の不成功を暗示する記述である。こうなると、彼が「結婚した日に、彼の能力ゆえ、彼がより高い給料に昇給して送信係に昇格し、オハイオ州コロンバスの局に転勤になった。そこで、彼は若い妻と新居を構え、分割払いで家を買うことになった」(67)ことが皮肉さを強調することになる。デイトン (Dayton) から州都のコロンバスに転勤になったことは、彼の移動がいわゆる栄転であることを強調している。

コロンバスの新居では、ウォッシュは裏庭に菜園を作った。ウォッシュは「エンドウ豆やトウモロコシ」(67)を育てた。「エンドウ豆」は「愛や幸福」¹⁸を暗示する。これはウォッシュの気持ちを暗示するものか。その一方、「トウモロコシ」は「豊饒」¹⁹以外に「淫乱な人々」²⁰を象徴することがあり、ここでは後者でウォッシュの元妻の精神的、感情的変容を暗示しているものか。因みに、ウォッシュが、裏庭の土を鋤で掘り返している傍らで、元妻がウォッシュの掘り返した「虫を怖がるふりをした」(67)ことは、かなり皮肉に感じられる。ここでいう「虫」(“the worms”)は、土の中にいるものなのでうじではないが、この worm という単語には「処女を食い荒らすもの、ヘビの小型版」²¹という象徴的な意味があり、これから不貞行為を働くことになる元妻の運命に、エデンの園でアダム (Adam) より先にヘビに誑かされて墮落するエヴァ (Eve) に似たものがあると考え、ウォッシュの元妻が「虫」を怖がる姿は、本当は怖くはないのだろうにという思いを読者に抱かせる。さらに、この worm という単語には「男性の性器」²²の意味もあり、“worms”は彼女が怖がる対象では全くない。ウォッシュが「奴が……虫を怖がるふりをした」と言うのは、彼もこれらの意味を感じているからであろう。彼が、女性を虫と同等に考えて、「奴らは、這い回り、腹ばいで進み、のたくるものだ」(66)と言うのは、ここからきているのだろうか。元妻は、ウォッシュが裏庭の畑を耕すのを手伝わなかった。彼女はウォッシュが種まきをする時に彼に種を少しずつ手渡しただけで、彼女自身は土には触れない。「庭」(“garden”)は、「幸福、救済、純真」²³を象徴するが、そこで野菜を育てたにもかかわらず、ウォッシュの幸せがより大きなものにならなかったのは、彼の「庭」は「裏庭」だからだろうか。ウォッシュが土おこしをする間、彼女は「飛び回って笑い声をたてていた」(67)。これは、彼女の放埒さを暗示するものと考えてよからう。

このような暗示のある女を、ウォッシュは「狂わんばかりに愛した」(67)。彼は、「春の夜の暗闇の中、黒い地面の上を這って彼女の足にすがりつき、彼女の前にひれ伏した」(67)り、「彼女の靴や裸に口づけをした」(67)りした。靴には「権威」²⁴の象徴の意味もあるので、こうした彼の愛し方は、元妻に対する絶対服従のような関係であったと言えるだろう。このような関係が、元妻の不貞行為の原因かどうかはわからないが、結婚して2年後に彼女が3人の男と不貞行為を行っていることが発覚した。2はもともと「不吉な数」²⁵とされるし、

3人娘の3番目の記述で既に出ているとおり、この章では3も良い意味では用いられていないので、この数字の使用は話の展開として矛盾はない。

元妻の不貞行為がわかって、ウォッシュは理由も訊かずに彼女を実家に戻しただけだった。そして、彼は「彼女が行ってしまうと、愚かな少年のように泣いた」(67)。のちに、2人の^よ縋りを戻させようとする元妻の母親から、彼は実家に呼び出される。そこで、彼は元妻を「赦し、[彼女の過ちを] 水に流したくて仕方がない」(68) 気持ちになった。既に、彼は「一人暮らしに堪えられなくなって、彼女を取り戻したい気持ちになっていた」(68)。彼は、彼女の育った家を訪れ、彼女の存在を再び身近に感じることで、「^{うぶ}初心で優しい」(68) 気持ちになっていた。彼女の「上品な」(68) 家と、その家の内装から、一家が社会的立場のある「立派な」(68) 家柄であることを痛感した彼は、彼女の不貞行為は、彼女には落ち度がなかったのではないかと思い始める。だから、彼は「彼女を誘惑したと彼が思っていた男たちを憎んだ」(68)。また、その責任は自分にあったのではないかと自分を責めもしただろうし、ことによると、彼女のおそらく権威ある父親から強い叱責を受けるかもしれないとも思ったのだらう。だから、彼は「すっかり体が震えてしまっていた」(68) のであらう。

しかし元妻は、「裸で部屋に入ってきた」(68)。おそらく、「彼女の母親がそうさせたのだらう」(68) とウォッシュは考えた。元妻は、自分の不貞行為の理由を説明することもなければ、謝ることもしなかった。^{おやこ}母子して、もう一度関係をもつことで不貞行為をなかったことにしようとした(とウォッシュは思った)。実際の不貞行為に対しては何も言わず、何もしないで元妻を実家に送り返したただけだったのに、ここで、彼が怒って椅子を振り上げたのは何故だろうか。彼は、もう一度自分と元妻が関係をもつことで、自分の怒りや心の傷がなかったものにできると相手が思っていることを知り、自分の妻に対する思いや自分の倫理的価値観を否定されたように感じたからではないだろうか。ウォッシュは、「椅子で一度元妻の母親を殴った」(68)。「椅子」は「権力、…… 判決」²⁶ の象徴である。つまり、この時、元妻と彼女の母親が赦しの対象にはならないことを認識し、女性は尊重に値しないという思いが確固たるものになったことを暗示する。しかし、騒ぎを聞きつけた隣人たちがすぐに入ってきて、「その椅子を取り上げた」(68)。これは、周囲の人間が、彼から夫としての地位を奪い、ある意味で、男としての彼を社会的に抹殺したことを意味するものか。

このようなことが起こって1カ月後、元妻の母親は、「熱病で死んだ」(30)。「熱病」には「不服従に対してヤハヴェが加える罰」²⁷ という暗示があり、語り手にそのような意図があったかはわからないが、元妻とその母親に対して倫理的な断罪が下されたような印象を与えることで、読者がウォッシュに同情を感じる余地を与えているようにも読めなくはない。

しかし、気をつけなければならないことは、たったの一瞬しか登場しないベル・カーペンター (Bell Carpenter) やホワイト夫人 (Mrs. White) でさえ名前を与えられているのに、ウォッシュの元妻は名前を示されないことである。これは、ウォッシュにとって女性は「皆

死んでいる」から名前がないのと同じということではない。彼は、「今でも奴を愛している」(67)と言っているから、名前はあるのだ。それでもウォッシュがそれを口にしないのは、彼がそれだけ元妻を憎悪していたからであり、また、語り手が彼女の名前を挙げないのは、この章の内容がウォッシュ・ウィリアムズの主観であることを強調するためであると考えられる。

なお、このウォッシュ・ウィリアムズという名前も、他の章の人物と同様に意味があるのだろう。WashはWashingtonやWashburnのニックネームともされるが、やはり「洗う」という意味の動詞とは切り離して考えることはできない。彼はもう、自分の手以外には、汚れたものをきれいにしようとはしないが、汚れたものを受け入れられずにいる彼の生き様は、このWashという名前と矛盾するものではない。姓のWilliamsも、もとになっているWilliamの語源は、Willahelmで「意思または願望+兜」、「兜は救済・武勇を意味するから『救済者願望』あるいは『勇壮な軍人願望』が本義か？」(『ジーニアス英和大辞典』)とされ、これも戦う人間もしくは抵抗する人間の印象を読者に与えるものとなっている。町の中で孤軍奮闘というよりも、無言の抵抗に近いが、自分の理想を貫こうとする人間の名前としては妥当なものと言えよう。

2. ウォッシュ・ウィリアムズの結婚生活についての語りについて

「ワインズバーグのすべての人間の中で、ウォッシュ・ウィリアムズの外見と性格を醜いものにしてしまったことの話を知っていたのはたった1人しかいなかった」(65)。それが、ジョージ・ウィラードだった。ウォッシュは「自分は奴らとは関係をもつつもりはない」(65)と言って、「町に住んでいる人間とは交際していなかった」(65)し、町の人間からも「ウォッシュとウォッシュの人間に対する憎悪には注意を払われなかった」(65)。それにもかかわらず、何故ウォッシュはジョージに自分の身の上話をする気になったのだろうか。「ジョージ・ウィラードと彼の父のホテルに住んでいる、この奇妙で不恰好な男は何度も話をしそうになっていた」(66)。ウォッシュはジョージに対して、「じっと見つめるその目に潜む……何か」(66)で「他の人間には話すことは何もないが、だが、お前には話したいことがある」(66)と伝えていた。ジョージも「ひどく醜く、意地の悪そうな顔がホテルの食堂を見回しているのを見ると好奇心の虜になった」(66)。

ウォッシュがジョージに話をしたいと思ったのは、ジョージが他の町の人間たちとは少し異なっているからだろうか。「母」²⁸ (“Mother”)において、彼は作家を志望し、「人間を見て考えたい」(21)と母親のエリザベス・ウィラード(Elizabeth Willard)に言う。しかし、ウォッシュとジョージが実際に言葉を交わすことはなかった。それが、実際に話をしようとウォッシュに思わせたのは、ジョージが「ベル・カーペンターの唇に口づけをしているのを見たから」(67)であり、さらに、「俺に起こったことが次に君に起こるかもしれない。俺は、

君に用心してほしいんだ。既に、君は頭に夢を描いているかもしれない。俺はそれを壊したい」(67) からだと彼は言う。夢という言葉に着眼するならば、「手」²⁹ (“Hands”) のウィング・ビドルボーム (Wing Biddlebaum) もジョージについて、他の町の人間と違うことを指摘している。ビドルボームは言う、「君は1人になって夢を見る傾向がある……」(11) と。もっとも、彼によればジョージは「夢を見ることを恐れ、…… 町の他の人間たちのまねをしようとして」(11) いて、「自分自身を滅ぼしつつある」(11) のだが。ジョージが夢見ることをやめておらず、この夢が、かつてのウォッシュが信じていたような女性の一途さを信じることだとするならば、ウォッシュが「君に用心してほしいんだ」とか「その夢を壊したいんだ」というのは、ジョージにはかつてのウォッシュと同じ心の傷を負う可能性があるというウォッシュが感じているからということになる。だとすると、ウォッシュは、ベル・カーペンターには求婚者がいることを知っていて、ジョージがそのことを知らないと思っているということになる。そうだとするならば、この章は、ジェイソン・グレイ (Jason Gray) が言うように、「ジョージへの警告の話である」³⁰。しかし、この、ジョージへの警告が、この章の主題であるかどうかは、まだ検討が必要なので、後で述べることにする。

ちなみに、ウォッシュが見たジョージが「木の下で……ベルと抱き合う姿」(65) —— ウォッシュは「ジョージがベルと口づけするのを見た」(66) と言っている —— も、ジョージが見た「木の下で草の上で眠っているように見えた」(66) ウォッシュの姿も、どちらも暗示的な意味合いをもっている。ジョージにとっても、ウォッシュにとっても、「木」は「避難場所」³¹ である。つまり、ジョージにとっては、実際には周囲の目から見えなくなっているのはいいが、「木」の下にいと周囲の人々から見えにくくなるような気分になっているのだろう。一方、ウォッシュにとっては「木」の下は、人間の社会生活から切り離された、ある種の隠遁の場のような意味である。さらに、ウォッシュが「草」の上に横たわっているのは、彼が「はかなさ」³² に身を委ねていることの暗示である。彼は、人間、特に、男の認識力の不確かさ、男という生き物の不甲斐なさを嘆いているのである。

さて、ウォッシュはジョージに過去の経験を話すために、ジョージは好奇心を駆り立てられてきたウォッシュの身の上話を聴くために連れ立って散歩に出る。この散歩は、おそらくウォッシュが誘ったものだ。「電報技師が黙り込んで、話をするについて心変わりしたように思われて、ジョージが雑談をしようとした」(66) と、語り手は言っている。ジョージに促されるように、ウォッシュは話を始める。ジョージは、「ひどく醜い男」(66) の「目に燃えたつ光」(66) に「半ば怯えながらも、半ば魅せられて」(66) 聴きいった。ウォッシュの目の光は、彼の女性に対する憎悪の現れである。暗がりでは話しをするウォッシュは、ジョージの想像では、「黒い髪」(66) と「黒い目」(66) をしている。これは、2人が話しているのが暗がりであるという以上の意味がある。髪の毛は「活力」³³ の象徴で、それが「黒い」のは、黒は「激情、… 悲しみ、悲嘆」³⁴ を表すので、ここではウォッシュの女性に対

する絶望や憎悪の強さを強調することになる。目は、「判断」³⁵する力を持ったり「気持ち」³⁶を表したりものなので、それが「黒い」のは、ウォッシュの女性に対する認識が不信と疑惑に満ちていることを暗示するものである。なお、目が「黒い」のは、実際には茶褐色(brown)なのであろうが、たとえそうだとした場合、茶褐色は「悲しみ、不毛」³⁷や「単純さ」³⁸を暗示するので、物語としてはおかしくはないが、やはり「黒」の方が、悪意が読者に伝わって、語り手が伝えたいことに近いのだろう。

ウォッシュは「低い平坦な声で話したので、彼の言葉が一層怖く聞こえた」(66)とは、ウォッシュが一時的な感情の高まりで言っているのではなく、一貫した思想として本気で言っていることを意味している。また、「憎悪の物語を語る醜い人間、ウォッシュ・ウィリアムズの声には、ほとんど美しいもの」(66)があって、暗闇の中で語っているウォッシュの顔はジョージには見えなかったため、ジョージは「自分が見苦しくない若者のとなりに座っているような想像を抱いていた」(66)ことを、語り手は、「ウォッシュは詩人になっていた。憎悪が彼をそのような気高さに引き上げていた」(66-67)と説明する。これは、要するに、語り手がこの章の冒頭で言う「一種の倒錯美」(“a kind of perverted beauty”) (64)のことである。ウォッシュは、社会通念上良いことを言っているわけではないし、論理的には理解を超える部分があるが、話を聴いているジョージは彼の言葉に納得させられてしまうということである。

このようにして、ウォッシュの過去は語られた。ジョージは、ウォッシュがなぜ「精神力の全てを傾けて人生を憎み」(65)、彼の「外見も性格も醜く」(65)なってしまったのかを知った。2人が、町のメインストリートに戻ってくると、「店の窓から漏れ出る光が明るく歩道を照らしていた。人々が笑いながら、お喋りをしながら行き来していた」(68)。この「光」は、ジョージに、現実の今の世界に戻って来たことを実感させ、そして、「人々」の姿は、ジョージの目には、ウォッシュのような苦勞を知らない気楽な存在に映ったことだろう。ここで、ジョージにはウォッシュに対するある一定の共感が生まれる。だから、彼は「気分が悪くなり、力が抜ける感じがした。想像の中ではあるが、自分もまた年老いて不恰好になったように感じた」(68)。

しかし、2人の間に一定の共感が生まれたからといって、ジョージがウォッシュの警告を受け入れたわけではない。つまり、ジョージは、この後、女性に対して強い不信感を抱いて生きようになるわけではない。そういう意味では、ジョージとウォッシュの間に本当の理解が成立したわけではない。このことは、2人が話をするために腰をかけていたものが「半ば腐っている枕木の山」(66)だったことも、暗示しているようだ(この「枕木」という表現は、p.66 にさらに3回、p.67 に1回、合計5回出てくる)。「枕木」は、いうまでもなく線路を等間隔につなぎ止めるためのものだが、この「枕木」は「半ば腐っている」ことからわかるように、今では用済みの、役には立たないものである。つまり、好奇心を抱いてウォッ

シュの話を聴きたいと思ったジョージと、女性というものについて警告したいと思ったウォッシュが、一時的に時間を過ごすために腰をおろすための場所であって、2人はすぐに別れてしまうということだ。もっと言えば、ウォッシュの話の、彼が決定的に女性に対して不信感を抱くようになった母親の話をするときには、2人は「枕木」から立ち上がって歩き出している。ウォッシュにとってはより大きな意味をもった母親がより精神的に腐敗しているという話の結末は、おそらくジョージには芯からは理解できてはいないのだ。「君の母親も……死んでいる」(66)(上点筆者)というウォッシュの言葉の意味が、ウォッシュからすれば、話の結末を聴かせることでジョージにも納得がいくはずであったのだろうが、ジョージにはそうは受け止められなかったと推測されるのである。なぜなら、ジョージには母親は精神的に近しい存在だったからである。彼は、「母」の章で母親、エリザベスの見舞いに行った際、こう言っている。

「ぼくはここを出て行こうと思うんだよ。……どこへ行くか、何をするかもわからないんだ。でも出て行くつもりだよ。……母さんにはわかってもらえないだろうな。でも、わかってもらえたらいいんだけど。」と、彼は熱心に言った。「父さんにはこのことを話すこともできないんだ。話そうとも思わないけど。無駄だからね。何をするかは、わからないよ。ここを出て、人間を見て、考えたいだけなんだ。……父さんが言ったことが、ここを出て行かないといけないうって確信させたんだ。」(21-22)

母親を身近に感じているジョージには、ウォッシュの話は「そういう墮落した母親もいる」という程度にしか受け止められなかったはずだ。この認識のずれが生じることを「枕木から立ち上がって歩き出した」(68)ことは暗示しているのだろう。

ところで、語り手は、ウォッシュの手について言っている、「彼は自分の手を大切にしていた。……電報局のデスクの上の機器のわきにおかれた彼の手には、何か敏感で格好の良いものがあつた」(64)。ほぼ全てが汚かった彼が、何故、その手だけは大切にしていたのか。ジェイソン・グレイは、「ウォッシュは町の電報技師であり、意思疎通をするのに文字通り手に依存している」³⁹と言う。デイヴィッド・スタックは、『オハイオ州ワインズバーグ』の端役を含めた傾向として、「手はその個人の、他者へのつながりを求める深い欲求を表すものである」⁴⁰と言う。スタックの指摘は結果的にはある程度可能であるということになりそうだが、グレイの指摘は正しいのだろうか。

手が持つ影響力については、ウォッシュ自身が認めている。彼が女性について語るとき、女は「柔らかい手と青い目をもって」(66)這い回るものだと言う。既に指摘したように、「青い目」は、心が猥褻であることを暗示する。「柔らかい手」の「柔らかい」(“soft”)には

「甘ったるい、媚びるような、なまめかしい」⁴¹、「甘い (amorous = 好色な、多情の)」⁴² の意味があり、情欲をそそる力のあるものの意味になる。ウォッシュは、「もし彼女が入ってきて、その手で自分に触れただけで、自分はおそらく卒倒するであろうと思った」(68) と言っていて、手に、人の心に作用する力があることを彼は暗に認めている。

しかし、彼は、そのような手の他人に対する影響力を行使しているか。つまり、ジェイソン・グレイが言うように、ウォッシュは手に頼って意思疎通をしているのか。そもそも、彼は意思疎通をしようとしているのか。彼は、「奴らとは関わりはもたぬ」(66) と言って「町の人間とは交わらなかった」(66)。確かに、彼はジョージとの話の中で、「俺は、男たちが女というものをもう少し理解するようになってほしいと思っている」(66) と言っている。この言葉を文字通り受け取れば、普段、周囲の人間と意思疎通は行わないが言いたいことはあるということになる。だが、その普段言わないが言いたいことをジョージに伝えるときに、ウォッシュは手を全く使っていない。もし、彼が本当に意思疎通をするのに手に頼っているのなら、ジョージと話しをするときに、手についての何らかの描写があっていいはずだ。例えば、手でジョージの肩を叩くとか、話の初めか最後に握手をするとか。ジョージに触れなくても、その手で枕木を叩くとか。でも、ウォッシュは、彼の一番言いたいことをジョージに伝える間に、その手で何もしていない。この事実を重視するなら、ウォッシュは、意思疎通をする際に手に頼ってはいないということになる。実際、「彼の手には、何か敏感で格好の良いものがあつた」(64) という語り手の言葉には、「電報局のデスクの上の機器のわきにおかれた彼の手には」(64) という説明がついている。ウォッシュは、その手を使って自分の言いたいことを伝えるのではなく、他人の言いたいことを正しく伝えるためにその手を使っているにすぎないのである。

では、何故、彼はその手を大切にするのか。語り手が言うには、「若かりし頃、ウォッシュ・ウィリアムズは州で最も優れた電報技師と呼ばれており、ワインズバーグの人目につかない局に左遷されたとはいえ、彼は今なおその能力を誇りにしていた」(64-65)。つまり、ウォッシュは、自分の技師としての能力を維持するために、手の敏感さが失われないように心がけていたということである。彼は、かつては「州で最も優れた」と言われた自分の電報技師としての能力を守りたかったのである。それは自分が存在する意味を守ろうとしたと言ってもよい。強い人間不信になり、社会の中に自分の居場所をほぼ見いだせないウォッシュにとって、電報技師としての存在意義は、彼が守るべき唯一のものだったのだ。それは、「母」の章のエリザベス・ウィラードが病気で体が弱っているにもかかわらず、体が動くときには、進んでホテルの仕事をしたのと同じだ。彼女は、ホテルの仕事をすることで、自分が父の残したホテルの経営に携わり、ホテルは夫のトム・ウィラード (Tom Willard) に乗っ取られてもないし潰れてもない、そして自分も死んではないことを確認しようとした。ウォッシュが自分の手を大切に、自分の技師としての能力を守ろうとしたのは、エリザ

ベスのこの心理と同じである。

なお、先ほど、デイヴィッド・スタックの指摘が、結果的にはある程度可能であると言ったのは、ジョージにその本心を語ったことを考慮すれば、ウォッシュには自分の考えを伝えたいという思いが全くないとは言えないから、ある程度可能だという意味である。それでも、まだ、ウォッシュの手が「恰好のよいもの」(64)があるという記述には説明がついていない。これは、彼が、男と女の関係についての、ある種の理想を心に秘めていることを暗示しているのだろう。それは、おそらく、愛し合うことを誓って婚姻関係になった男女は、相手を愛し続けるべきであるというという程度のものだろう。極めて当たり前で、健全だが、ある意味難しい理想である。手が、他人に影響力を及ぼすものであるなら、その影響力は健全なものとして行使されるべきであるということだろう。その理想が、彼の手の恰好の良さとなって表れているのだろう。だが、彼が、その理想を語ることはジョージを含めた誰に対してもないのである。

3. この章の主題は何か

ジェイソン・グレイは、この章は「ジョージへの警告の物語である」⁴³と言う。この解釈は『オハイオ州ワインズバーグ』全体を、ジョージ・ウィラードを主人公とする物語として読み、この話をワインズバーグの町でのひとつの彼の体験として解釈するならば——その際は、既に指摘したように、彼が自分の価値観、信条としてウォッシュの人間不信を受け入れていないことに注意する必要がある——可能なように思われなくもない。しかし、ジョージがウォッシュの話も聴いても、彼の精神的な価値観や信条を変えていないことを重視するならば、この章の主題はもっと別のものと考えるべきである。それは、この章のタイトルである「尊敬すべき資質」(“Respectability”)の意味を考えるとところから得られるだろう。

このrespectability という単語の形容詞形 (respectable) をウォッシュが元妻の一家を形容するのに使っている。「奴らは、いわゆる立派な人々と呼ばれる奴らだった」(68)と。元妻の一家は、「上品な」(68)家に住み、その家の内装も豪華だった。よく考えてみれば、元妻の父親——実際に物語には全く出てこないけれど——が「歯医者」(“dentist”)だったのも意味があるのだろう。歯は「舌を保護するもの、……力の象徴」⁴⁴であり、「性的エネルギーの活動を表す」⁴⁵ものである。また、歯によって守られるとされる舌は、「不実」⁴⁶の象徴でもあるし「無節操、女の武器を表す」⁴⁷ともされる。つまり、ウォッシュの元妻の一家は豊かな暮らしをして、社会的な地位を有する一方、それに見合った精神的な豊かさ、もっと言えば、倫理的な好ましさは持ち合わせていなかったということである。娘が不貞行為をしたことを謝罪することもなく、事情の説明もなく、再び、関係をもつことで、実家に送り返されてきた娘と元夫の仲を取り繕おうとした浅はかさを、この章のタイトルである「尊敬すべき資質」(“Respectability”)は浮き彫りにしているのである。物質的な豊かさの

裏にあるこのような精神的な頹廃こそ、この章の主題である。

この精神的頹廃に、語り手がどの程度非難の意味を込めているのかは現時点ではわからないが、少なくとも、ウォッシュ・ウィリアムズが、それに強烈な非難の気持ちをもっていることは確かである。町の人間たち、正確には男たちも、ウォッシュに「敬意」(“homage”) (65) を払ってはいるが、それは、この精神的な頹廃を非難するものではない。彼らは、ウォッシュが女性に対して「燃え立つような憤懣」(65) をもち、それを隠していないことに対して「敬意」を払っているにすぎない。

最後に、この章の記述からわかるワインズバーグの町の女性たちの地位について言及する。研究者は、ワインズバーグの女性たちをピューリタンの価値観もしくは男女の社会的地位の不平等による女性の不自由さの被害者と読むことが多い。サリー・アデア・リグズビー(Sally Adair Rigsbee) は、「アンダソンはワインズバーグの因習的な性的道徳によって女性が欲求を満たすことを如何に妨げられているかを描いている」⁴⁸ と言う。ワインズバーグの女性たちが因習的な価値観や政治的な不平等の下に置かれていたのは確かであろう。しかし、この章においては、ウォッシュの元妻は、これには当てはまらない。ワインズバーグの町が、ジェイソン・グレイの言う「神を畏怖する共同体」⁴⁹ であるならば、彼女はそれに住まうに相応しい人間では全くない。この章において、ピューリタンの価値観が苦しみを与えたのはウォッシュ・ウィリアムズである。彼は、「一種の宗教的な熱情によって、彼は若い日の罨をうまく切り抜け、結婚後まで性的純真を貫いていた」(67)。彼は自分に厳しかった分、それだけ相手にも厳しさを求めたはずである。その分、元妻に裏切られたことは精神的に大きな傷となったはずであるから。さらにいうと、ウォッシュは元妻に裏切られても「今なお彼女を愛している」(67)。女性に対する憎悪と元妻に対する愛情という相反する感情を心の中に秘めているために、彼は前向きに生きることができずにいる。彼の外見上の不恰好さは、実は、このような相反する感情が心の中にあることも暗示していると言えるはずである。

話を女性の地位に戻そう。ウォッシュの元妻は、性に対して極めて積極的だ。彼女は、性に対して積極的に行動するという点においては、「誰にもわからない」⁵⁰ (“Nobody Knows”) のルーズ・トラニアン(Louise Trunnion) や「予期せぬ体験」(“Adventure”) のアリス・ハインドマン(Alice Hindman) と、同類の女性であると言えるはずである。ジョン・アップダイク(John Updike) は、「シャーウッド・アンダソンが描く女性たちは、男性たちと同様に、漠然とした飢えと密かな名状しがたい欲求を大いに感じている」⁵¹ と言うが、欲求を感じているだけではなく、彼女たちはそれを満たすために行動する力も持っているのだ。

それでは、社会生活においてはどうか。彼女たちは、『オハイオ州ワインズバーグ』の物語中の現在においては参政権を与えられていなかったはずである。しかし、実際のところ、彼女たちは家庭や地域社会において本当に発言権がなかったとは言えないようである。

そこここに、この電報技師を尊敬する男がいた。そういう男は、自分が実際に怒りを示す勇気のないものに対する燃え立つような憤懣をウォッシュの心の中に見出した。ウォッシュが町の中を歩くと、そういう男は本能的に彼に敬意を示し、彼の前で帽子を頭から持ち上げたり頭を下げたりした。…… ウォッシュの上司が銀行家の妻から苦情の手紙を受け取ったときは、彼はそれを破いて不愉快そうに笑った。どういうわけか、彼はその手紙を破り捨てるとき、自分の妻を思い出した。(66)

ここから読み取れることは、男が女に対して不満を感じてもそれを口に出すことは出来ないということだ。銀行家夫人が町で発言権をもっているのは夫の地位からして理解できる。しかし、ウォッシュの上司も自分の妻の口うるささに抵抗できずにいるらしいことが読み取れる。この記述には誇張もあるだろうし、冗談の意味も込められているだろう。しかし、ある程度は、これが現実だから、読者に受け入れられるのだろう。

ウォッシュが言う、「[女は] 男の視界の中を歩いて、その存在でこの世を汚れたものにする。…… 奴らは、男がこの世界を価値あるものにするのを邪魔する……」(66) というのは、明らかに言い過ぎであり、ウォッシュの個人的な見解であって、語り手がこのような女性観をもっていたとは言い切れない。(そもそも、「この世界を価値あるものにする」という時の「価値あるもの」とはどのような状態を言っているのかは明らかではない。漠然と道徳的に頹廃していない状態のことという以上の推測はできない。) また、彼の元妻の父親が全く話に出てこないのもかなり作作的であって不自然であるが、これは、おそらく、物語の展開上の演出である。着目すべきなのは、ワインズバーグには、町社会の中でかなり奔放に振る舞っている女性がいるらしいということである。

註

この論考は、「大学院紀要」第50集（東洋大学大学院、2014. pp.195 - 211）に掲載された「『オハイオ州ワインズバーグ』を読む（7）」の続稿である。

-
1. Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio*. First Edition. Ed. Charles E. Modlin and Ray Lewis White. (New York: W.W.Norton & Company, 1996) p.7. 以下、本稿における作品からの引用はすべてこの版からのものとし、本文では（ ）内にページ数のみを記すこととする。なお、この「真実」とは「グロテスクな者の書」(“The Book of the Grotesque”) で、老人が言及する真実のことである。老人の考えでは、真実とは一人の人間がひとつまたは幾つかを手にすると、その人間たちをグロテスクにするものであり、老人は、「それらの人々がそれらの真実のひとつを自分のために手にして、それを自分の真実と呼び、それに従って生きようとするやいなや、

その人間はグロテスクになり、その人間が抱いた真実は誤りとなる」(7) という。

2. Sherwood Anderson, "Respectability," *Winesburg, Ohio*. 前掲書に同じ。pp.64-68
3. このように人物の心の有り様を外見が暗示する例として、「予期せぬ体験」("Adventure") (Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio*. (前掲書に同じ) pp. 59-64) のアリス・ハインドマン (Alice Hindman) がいる。彼女は、「やや痩せて」(59) いて神経質らしく、「頭が大きく、身体の大きさにまさって」(59) おり、さらに、その目や髪が自制や禁欲生活を暗示する「鳶色である」(59) ことから、彼女が理性によって本能的な何かを抑圧していることを感じさせる。
4. アト・ド・フリース著、山下圭一郎他共訳、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1991。
5. 前掲書に同じ。
6. 前掲書に同じ。
7. David Stouck, "Anderson's Expressionist Art," *Winesburg, Ohio*. (既出), p.224
8. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
9. 前掲書に同じ。
10. 『ジーニアス英和大辞典』(第6版)、小西友七、南出康世編集主幹、大修館書店、2001。
11. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
12. ただし、ウォッシュの実際の語りでは、"blonde" という言葉が使われている (76)。これは、結婚する時は、妻になる女が不貞行為を行うような人間ではないと思っていたことを暗示するものだろう。
13. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
14. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
15. 前掲書に同じ。
16. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
17. 前掲書に同じ。
18. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
19. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
20. 前掲書に同じ。
21. 前掲書に同じ。
22. 『リーダーズ・プラス』、松田徳一郎編集代表、研究社、2002。
23. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
24. 前掲書に同じ。
25. 前掲書に同じ。
26. 前掲書に同じ。
27. 前掲書に同じ。
28. Sherwood Anderson, "Mother," *Winesburg, Ohio*. 前掲書に同じ。pp.16-22

29. Sherwood Anderson, "Hands," *Winesburg, Ohio*. 前掲書に同じ。 pp.9-13
30. Jason Gray, "Sherwood Anderson's *Winesburg, Ohio*," *American Writers Classics*, Volume II, Ed. Jay Parini. New York: Charles Scribner's Sons, 2004. p.312
31. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
32. 前掲書に同じ。
33. 前掲書に同じ。
34. 前掲書に同じ。
35. 前掲書に同じ。
36. 前掲書に同じ。
37. 前掲書に同じ。
38. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
39. Jason Gray, "Sherwood Anderson's *Winesburg, Ohio*." (既出)、p.312
40. David Stouck, "Anderson's Expressionist Art," *Winesburg, Ohio*. (既出), p.223
41. 『ランダムハウス英和大辞典』(第2版)、小西友七、安井稔、國廣哲彌、堀内克明編集主幹、小学館、1993。
42. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
43. Jason Gray, "Sherwood Anderson's *Winesburg, Ohio*." (既出)、p.312
44. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
45. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
46. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。舌は「雄弁、味覚」の象徴でもある。
47. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
48. Sally Adair Rigsbee. "The Feminine in *Winesburg, Ohio*." *Winesburg, Ohio*. (既出)、pp.179-180. なお、この他に、花岡秀「『ワインズバーグ・オハイオ』の空間とグロテスクな人びと」、(『シャーウッド・アンダソンの文学』、高田賢一、森岡裕一編著、ミネルヴァ書房、1999. p125.) や藤森かよこ「晴れた宵にはジェンダーの外部が見える?」、(前掲書に同じ、p.142.) が同様の見解を示している。
49. Jason Gray, "Sherwood Anderson's *Winesburg, Ohio*." (既出)、p.305
50. Sherwood Anderson, "Nobody Knows," *Winesburg, Ohio*. 前掲書に同じ。 pp.27-29
51. John Updike, "Twisted Apples," *Winesburg, Ohio*. 前掲書に同じ。 p.192

A Reading of *Winesburg, Ohio* (8) : What is the theme of “Respectability” ?

SHIMBORI, Takashi

This is a part of my serialized essay, “A Reading of *Winesburg, Ohio*,” the aim of which is to define what “truth” is to each main character of respective stories of the book. The narrator of “The Book of the Grotesque” states that “the moment one of the people [main characters of respective stories] took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood.” In this installment, “Respectability” is read closely. However, the truth to the main character Wash Williams is clear. He says, “All women are dead. [She is] walking in the sight of men and making the earth foul by her presence. There is something rotten about them. They are sent to prevent men making the world worth while.” This is Wash Williams’s truth. This paper focuses on these three points: how Wash Williams was led into a strong mistrust of women, why he takes “care of his hands,” and what the theme of this chapter is. The social position of women in Winesburg is also touched upon.

Wash Williams is “the ugliest” in town, and “even the whites of his eyes” look “soiled.” These symbolize his warped recognition of people, especially women. This results from his ex-wife’s infidelity and her and her mother’s attempt to smother it up. Her mother makes her show up “naked” in front of Wash, hoping that they will make love and re-unite. When his ex-wife is first introduced to readers, her appearance shows signs of her unfaithfulness: her eyes are described as “blue” and her hair “yellow,” not blonde or golden. Both “blue” and “yellow” have a bad connotation such as unfaithfulness or decadence. After their marriage, he plants vegetables such as “peas and corn” in “the garden back” of their house. “Peas” connote love or happiness, seeming to imply Wash’s hope that they will be happy, while “corn” connotes wanton people, seeming to imply his ex-wife’s unfaithfulness. She “[runs] about laughing and pretending to be afraid of the worms” which he uncovers, without helping him to turn up the black ground. This also implies her license, and makes readers feel that she is really not afraid of the worms. Worms are said to have an image of creatures which spoil virgins like miniature snakes. Wash’s ex-wife is going to be unfaithful, whose fate seems to be similar to Eve’s in the Garden of Eden, as she was talked to and

seduced by a snake. Also, the word “worm” means a virile member. This is why her pretense of being afraid of the worms seems to be extremely inconsistent. Wash “[plants] vegetables” in his “garden” but it does not promote Wash’s happiness though a garden usually connotes happiness, relief, or purity. Two years after their marriage, he finds that his ex-wife has three lovers.

Why does Wash Williams take “care of his hands”? Jason Gray says, “Wash is the town telegraph operator, the man who must literally rely on his hands to communicate.” Wash Williams admits the power of hands, saying that women have “soft hands” and that if his ex-wife “just touched me with her hand I would perhaps faint away.” However, he does not do anything with his hands while he is telling the story to George. Neither does he associate with people in town in everyday life, saying, “I’ll have nothing to do with them.” He does not even try to communicate. He uses his hands only for his job as a telegraph operator, in order to convey accurately what other people want to convey through the telegraph. He only wants to protect his pride as a good operator who used to be called “the best operator in the state.” To Wash, his pride is the only thing that he needs, because he can no longer find other social significance in town than being a good operator.

What is the theme of this chapter? Jason Gray says, “The story of Wash Williams is a cautionary tale for George.” However, it does not seem that George has changed his attitude toward women. Additionally, he might not understand his story fully. Therefore, Wash’s story is not meaningful to George as a caution. The important point in this chapter is that Wash’s ex-wife is from a wealthy family. Although they are “what is called respectable people,” neither she nor her mother explains the reason why she committed adultery or apologized for it. The title of “Respectability” reveals their shallowness or demoralization behind wealth. This is the theme of this chapter.

As for the social position of women in Winesburg, some critics consider them victims of Puritanical values and social inequality. Jason Gray calls Winesburg “a God-fearing community” but Wash’s ex-wife cannot not be a “God-fearing” person. Sally Adair Rigsbee says, “Anderson shows how the conventional sexual morality of Winesburg works against the fulfillment of women’s needs” but she could not be among those women. She is as sexually active as Louise Trunnion in “Nobody Knows,” and Alice Hindman in “Adventure.” In addition, it is shown in this chapter that *some* women in Winesburg are allowed a big voice. There are some men who “[respect] the operator,” because they instinctively “[feel] in him a glowing resentment of something he had not the courage to resent.” This is why they pay him “homage.”